

芭蕉二百回忌句集の研究 —信州諏訪地方を中心に—

常盤 あかね

明治26(1893)年は、松尾芭蕉の二百回忌にあたる年である。この年の前後数年間、芭蕉の二百回忌を記念し、記念句集の出版や句碑の建立などが日本各地で行われた。また、正岡子規が「芭蕉雑談」を發表し、俳句革新が本格的に動き始められた年でもあり、明治26年は俳句界において旧派、新派を問わず重要な年であると考えられる。

明治26年に信州諏訪地方では、旧派の『草の餅』(明治26年刊 岩波其残編)と『時雨集』(明治26年刊 鷺湖庵省我編)というふたつの芭蕉二百回忌句集が出版された。これまで、このふたつの句集について、『時雨集』については研究があるものの『草の餅』については研究がなされておらず、ともに翻刻もされていない。

信州諏訪地方においても明治26年は重要な年であったと思われる。しかし、明治期の諏訪俳壇についての研究も少なく、先行研究では、この年に注目されていない。そのため、このふたつの句集の分析をすることにより、どのような旧派の俳人たちがいたか、またどのような句が詠まれていたかがわかる。そのため、諏訪の俳句史研究の基礎研究になるという意義がある。

本研究では、信州諏訪地方で出版された『草の餅』(明治26年刊 岩波其残編)と『時雨集』(明治26年刊 鷺湖庵省我編)というふたつの句集を中心に考察を行った。具体的な研究方法としては、各句集の翻刻を行い、データをExcel2010に入力し、内容の比較分析をし、俳人の調査を行い、その特徴などを明らかにした。また、参考までに諏訪で出版された『産湯』(明治35年刊 中林春窓編)などの、芭蕉二百回忌句集以降に出版された句集もとりあげ、諏訪俳壇においては、子規の影響を受け、変わったのかについて考察を行った。

その結果、『草の餅』と『時雨集』は、掲載されている句に[時雨]ということばが多く用いられているという句の特徴や句が掲載されている俳人など、類似点が多いことが明らかになった。また、芭蕉二百回忌句集以降に信州諏訪地方で出版された句集と芭蕉二百回忌句集を比較することにより、信州諏訪地方の俳人と他の地域の俳人との交流関係も明らかになった。

信州諏訪地方は曾良や素檠などの優れた俳人を輩出していることや江戸時代より続いている蕉風俳諧の伝統が根強い地域であり、信州諏訪地方には明治旧派の俳人が多かったということが明らかになった。

今後の課題は、今回取り上げた句集以降に信州諏訪地方で出版された句集との比較をすることが挙げられる。

(指導教員 綿抜豊昭)